

EurekaXIII

六年制通信 No.13 令和7年6月27日(金)号

説明会にて

6月15日に300名以上の来場者を迎えて学校説明会を行いました。今回はその時に話したことを中心にしながら、時間の都合で伝えきれなかったことを少し詳しく書いてみようと思います。そう言えば、君たちも入学前に説明会に来たのかな。

まず、学校で勉強するということについて確認することがあります。それは皆さんが「勉強のできる子」であるということです。このことを自覚するところから勉強を始めるべきです。もちろん、ここで言う「勉強のできる子」というのは成績のいい子というわけではありません。「勉強することを妨げられない子」という意味です。世界には皆さんと同じ年で、勉強する時間を持ってない若者がたくさんいます。勉強する自由を奪われている若者が大勢いるのです。あるいは戦争で、あるいは貧困のせいで。君たちの若さで、すでに家庭のために働いている子がいます。実は昔の日本もそうでした。米作りの農繁期など子どもは労働力とみなされ、当然学校へなど通わせてもらえませんでした。したがって勉強したがる子や成績のいい子は農家では困った子だったのです。国の政策として子どもに教育を受けさせなければならなかったのは、幼い子どもを過酷な労働から解放する目的もあったのだと思います。義務教育という言葉ができたのは明治19年ですが、小学校6年中学校3年と9年間にはっきり定められたのは昭和22年のことです。まだ歴史は浅いのですね。

今現在世界を見れば勉強どころではない子どもたちがたくさんいることを知り、自分は何不自由なく勉強のできる環境にいることに感謝するところから、自分の学校生活を考えるべきです。勉強のできる子でいられることは当たり前ではなく、文字通り「有り難い」ことなのだという自覚が大切だと言いたいのです。

また、学校説明会では「うちの学校は楽しいですよ」とアピールするのが普通なのでしょうが、私はそういうことは言いません。楽しいか楽しくないかは極めて個人的な感覚だからです。例えば何でもいいのですが、君たちがAとBのどちらでも選べるとして、私がAが楽しいと思っているという理由で、「Aを選んだら君たち全員が楽しいですよ」などと言えますかね。また、こういう場合の「楽しいですよ」というのは非常に受け身な感情を指しているように思います。「楽しい」のではなく「楽しむ」が正しいと思います。この学校で楽しみなさい、これなら私にも言えます。いつも言うように、自分と同じ感性を持った人間は一人もいません。ちょっと話は変わるかもしれませんが、君たちは「黄金律」を知っていますか。「汝、人にせられんと欲する如く、その如く人にもせよ」です。聞いたことあるでしょ。『新約聖書』の「マタイによる福

音書」第7章12節にある言葉です。皮肉屋のバーナード・ショウが黄金律と反対のことを理由をつけて言っています。すなわち「汝、人にせられんと欲する如く、その如く人にはするな。人々の趣味は同じではないかも知れぬ」と。ショウは趣味と言っていますが、感性でも同じです。確かに、これももう一つの黄金律と言えそうですね。

さて、「楽しい」のではなく「楽しむ」というのは姿勢の問題で、誰にでもできることです。面白いから笑うのではなく笑うから面白いのだと言った人がいましたが、ある意味正しい気がします。楽しむから楽しくなるのだという一面が勉強にはありますね。しかし実は、勉強というのは本質的に楽しくて面白いものであるはずなのです。なぜなら、学校というのは知らないことを教えてくれて、その結果私たちはできないことができるようになるわけでしょう。そんな楽しいことないですよ。私は今梅村幼稚園に絵本の読み聞かせに行っているのですが、あの4歳5歳のラブリーな子たちは文字や数字の扱いを知りません。世の中の仕組みのほとんどを知りません。あれから10年とたたないうちに、彼らは連立方程式を解き英単語を覚え、理科の実験を行い、中島敦の『名人伝』（これ、私がいつも君たちに朗読する小説ね）を鑑賞できるようになるわけです。具体的な事象だけでは満足できず、記号を使って一般化するという抽象化を駆使するようにもなります。このような知的営みが楽しくないわけがない、と私は思うのですが。ですから、ただでさえ楽しいところへ「楽しむ」という心をもって入学すれば、楽しさ倍増ですよ。何度も言いますが、この楽しいという感情は極めて個人的なものです。勉強が苦しいとすれば、それは人と比べるからです。楽しいという感情を人と比べることが無意味のように、勉強も君だけのものです。今回は、入学前の児童の皆さんだけでなく、今の君たちにも同じ話をしたくなったわけです。

今週のおすすめ

・水生大海 『最後のページをめくるまで』 （双葉文庫）

タイトルから推察できるように、どんでん返しの短編集です。5作品が楽しめますよ。これを読みながら思い出したのですが、百田尚樹の『幸福な生活』は最後の一行で物語がひっくり返る仕掛けがなされていました。一ページではなく一行ね。しかも確かその最後の一行はページをめくったところに書かれていたような。よかったら百田さんのもの読んでみて下さい。今回の作品群は、いつものようにラストを予測しながら読んで、裏切られる喜びを楽しもうとしたわけですが、3作品は予測できず、1作品は9割がた予測通り、1作品は予測が当たってしまいました。言ってみれば普通のミステリー短編集ですから、肩コリをほぐすのにはもって来いですね。

特殊詐欺に関わってしまった男の話が一番笑ってしまいました。ラスト、主人公には気の毒なのですがね。これ、タイトルが「わずかばかりの犠牲」なのですが、読み終わるとよくできたタイトルだと、ここに物語のヒントがあったのにと、そう思いました。私も車の運転をしながら日々社会の高齢化を実感していますが、いやいやなかなか侮れない不敵なお年寄りもいるようで…。是非、お楽しみを。

BGMは Whiteberry の 夏祭り でした…。